

NIHONJIN NO WASUREMONO
第2部 忘れもの 27

京都型
ビジネス



沓掛英二氏
野村證券株式会社代表取締役副社長

起業家精神旺盛で活気に満ちた都市

顔が見える範囲のつながりを大事に

村山裕三氏
同志社大学大学院ビジネス研究科教授



京都です。これは経営学的にみると、信頼関係が企業活動に必要な情報収集などの取引費用を低下させ、ビ

村山●100年以上も続いている企業がこれほど集積しているのは、世界を見回してみても、実は京都しかないんです。現在では150万人の人口を擁する大都市ですが、他都市と比較して、いまだに昔ながらの「ムラ」的な部分が残り、人と人との信頼関係を、なおざりにすると生きていけないのが

●くつかけ・えいじ
1960年、長野県生まれ。明治大政治経済学部卒業後、野村證券株式会社入社。厚本支店や福井支店、新宿野村ビル支店の支店長を務めた後、2004年には京都支店支店長に就任。執行役員、常務執行役員営業部門担当などを経て、12年8月代表取締役副社長に就任。

●むらやま・ゆうぞう
1953年、京都府生まれ。75年同志社大経済学部卒業。82年ワシントン大よりPh.D(経済学)取得。野村総合研究所、大阪外国語大地域文化学教授などを経て、現在は同志社大学大学院ビジネス研究科教授。JRI西日本社外取締役も務める。



大正期、野村合名会社を大阪で創業した野村徳七は、本業の傍ら、日本の伝統文化の発展にも大きく寄与した。

でしようが、京都では、大企業の経営者が熱心にベンチャー企業を育てようとしていると聞きました。近年、人材の多様性、ダイバーシティーマネジメントが重要視されていますが、国籍、性別、思想等を問わず、どんな人であろうと、信頼関係をベースに若い人材を育てる風土が京都にはある。京都型ビジネスは、グローバル化がますます進む世界で特色あるビジネススタンダードになり得ます。また京都企業と呼ばれる多くの企業は、やみくもに経営規模を拡大したり、本社を東京に移すことには、あまり関心が少ない。それ

でいて世界の情報に敏感で

村山●京都人は基本的に、信頼関係をベースに、顔が見える範囲の人のつながりを大事にします。経営者は従業員にフェ

ース・ツウ・フエースで接し

て経営し、やみくもに業容を拡大させません。経営者同士が意見、情報交換をす

るのにも、京都という都市の規模がちょうどよく、もちろん世界に通用する「京都」ブランドや品格も備えている。だから東京に本社を移さない。規模の拡大を目標にしないというところは、売上げの急拡大が期待できないわけですから、付加価値の向上を優先させ、世界レベルでシェアを高める独自性のある商品を開発する。これが京都型ビジネスの基本戦略です。

沓掛●1922(大正11)年に野村合名会社を大阪で創業した野村徳七は、当初から京都に注目。お茶や能狂言をたしなみ、お客さまをもてなすため、南禅寺(東山区)の近くに、現在は重要文化財に指定されている碧雲荘(野村別邸)を建設するなど、日本の伝統文化発展にも寄与しました。京都人は、

「きょうの心伝て」募集

●あなたの思う「日本人の忘れもの」は何ですか? 暮らしの中で忘れてはならないと思ふ日本人の心の承諾や、伝えたい京都に残る心遣いなどを寄せて下さい。京都新聞社で選考、添削する場合もあります。原稿は返却いたしません。タイトル(12文字以内)と本文(400文字以内、郵便番号、住所、氏名(匿名は不可)、職業、年齢、電話番号を明記し、〒604-8577 京都新聞COM「きょうの心伝て」係まで、E-mail: asakuraonoh@nhk-yoto-np.co.jp Fax: 075-22612200

●日本人の忘れもの第2部のバックナンバーは、京都新聞ホームページでご覧いただけます。http://kyoto-np.jp/kp_kyo_np/info/new/

ネスが効率的に行われている都市ということになると思います。

欧米型のビジネスは競争原理で成立していますが、京都では異業種だけでなく、同じ業界内でも切磋琢磨しながら成長していく企業が多い傾向があります。社内でも、経営者と従業員の間に理念を共有することを重視するため、競合他社がまねのできない個性的な会社運営ができています。一方で、他の地域から来た人でも、懸命に頑張っている。私の本「京都型ビジネス」独創と継続の経営術」にも書いた京都企業の特徴です。

沓掛●確かに欧米や東京だと、有望なベンチャー企業が台頭してくると、すぐに合併や買収話を持ち掛けるところ

が、京都では、大企業の経営者が熱心にベンチャー企業を育てようとしていると聞きました。近年、人材の多様性、ダイバーシティーマネジメントが重要視されていますが、国籍、性別、思想等を問わず、どんな人であろうと、信頼関係をベースに若い人材を育てる風土が京都にはある。京都型ビジネスは、グローバル化がますます進む世界で特色あるビジネススタンダードになり得ます。また京都企業と呼ばれる多くの企業は、やみくもに経営規模を拡大したり、本社を東京に移すことには、あまり関心が少ない。それ

こうした社会貢献活動を熱心にながらも、決して声高には言いませんね。村山●野村さんは、狂言の茂山家や、お茶の藪内家などを手厚く支援されたお聞かしています。近年、企業のCSR(社会的責任)の重要性が問われていますが、京都の企業は昔から熱心に社会貢献をしているんです。だから、CSRという流行の経営用語で質問されても、「そんなものはしてへんで」という答えが返ってくるだけです。企業として地域貢献をするのは当たり前すぎて、いままさら何を聞くんだという感覚です。

沓掛●現在の日本は失われた20年と言われ、全てにおいて萎縮してしまっていると思えてなりません。京都のように、起業家精神が旺盛で教育、観光、文化など、さまざまな面で活気に満ちた都市に変わると、特にそう感じます。落ち込んでる時こそ、新しい夢や目標に向かって努力していくことが大切なのではないでしょうか。弊社も及ばずながら資本市場を通じた本業と、日本文化へのさらなる貢献に今後も精いっぱい努力したいと考えます。

◎コーディネーター
京都新聞総合研究所特別理事 吉澤健吉

きょうの季節せ(十二月)

燕の 巣も煤はいて やりにけり

雨蟹

正園子規は、次のような句も拾っている。「燕の巣をそこなふなす、私画藤」(分類俳句全集)。

家屋から電気が取り除かれて以来、煤で汚れることはなくなったが、年末の大掃除をして新年を迎える。掲句は屋内にも自由に巣造りの可能な日本家屋の構造が見えてくる。新しい年に燕が戻ってくることを願って人々は思いを尽した。

(文・岩城久治)

初田太郎
会社役員(滋賀県大津市/63歳)

「きょうの心伝て」
時間と自然の恵み

職場で能登土産の「ころ柿」をいただいた。歯ごたえと食感が口に広がら、腹が膨らんだ甘さを味わいながら、子どもと甘い、親の目を盗んで食べた、正月の鏡餅に飾られた竹串の干し柿の味を思い出した。白い粉を吹き、くすんだ深いオレンジ色の硬い干し柿は、空腹を満たした。種を口の中で器用に吐き出し、種を食べる。干し柿の竹串が柿のへただけになると、正月は終わった。

5月に黄色い花を咲かせ、梅雨を迎え青葉を茂らせ、厳しい暑さをしのいで実り輝いた淡柿の実は、皮をむき、軒先や田んぼの棚に吊るし、強い寒風と乾いた空気の中で熟成し、「ころ柿」となる。ゆるやかな時の流れと厳し、自然が逸品を作り出す。時間と自然が恵みをもたらすものが少なくなつたが、「ころ柿」は自然が育んだ、天然のお菓子。先人が伝える滋味豊かな保存食でもある。

干し柿を鏡餅で見かけなくなり久しい。伝統の価値が失われる時代の中で、「ころ柿」の味は忘れ去られないだろうか。

日本人の忘れもの。

この美しい国ではぐくまれた宝ものがあります。

遠い祖先が積みあげてきた技。磨きかけた暮らしの知恵と作法。花と語らい

鳥と遊び

風をたのしみ

月と戯れ

その花鳥風月に命を見つけて

神が宿ると信じて

草木国土悉皆成仏のころで

畏怖と親しみを自然に抱いた日本人。自然をとら感じ合うためのもてなしや遊び心など

ゆたかな文化を創造してきた

ここ、京都から日本に

伝えたいことがあります。

混迷の現代をまっしぐらに続ける「日本」。

将来の指針を「京都のこころ」に求め

わが国各分野第一線の英知が示す提言エッセー

「日本人の忘れもの」京都「こころ」に。

第一部連載収録。二月下旬発売予定。

予価一八九〇円

主催：「日本人の忘れもの」キャンペーン推進委員会(京都新聞社、京都商工本会、京都府、京都市、京都市観光協会)

企画協力：株式会社日商社

